

あとがき

デ・レーケ『吉野川検査復命書』（翻訳本）は、大変に難解な文章であります。その難解さの理由を挙げると、第一は文語文体の文章であるためであります。

第二は内容が十分に日本語としてこなれていないという点であります。その主な原因は、翻訳者が河川工学や地質学の専門的知識を十分に備えていなかったために原語に最も適切な日本語を選べなかったものと考えられます。例えば河川に流入した上砂の堆積した状況にしても、幾通りもの表現（洲嶼・洲渚・洲灘）をしています。これら種々の原語が同一語なのか、また別々のものなのかどうかは、翻訳本からは判定できません。もしこれが地質の専門家が訳したものであれば、そうした点を配慮して読者にも良く理解できるように翻訳文にするか、少なくとも必要な注記等で注意を喚起したと考えられます。

第三の分かりにくさは、固有名詞が特定できないことであります。ことに水源の山岳については、文中の山名の多くが現在の名称と相違しており、ほとんどを文意から割り出さざるをえなかったという状況でした。これはデ・レーケに随行した人々や、地元で接触した吉野川流域の人たちの山岳に対する知識が日常の生活空間をあまり越えなかったことを示しています。つまり当時の人々にとって、生活にかかわりのない、奥山に対してはほとんど関心がなかったことを示しています。

こうした文章をできるだけ原文に忠実に、しかも分かりやすい現代日本語に置き換えることは、想像以上に苦勞しました。

現代語化の作業は、研究会メンバー全体の共同作業であります。まず最初に大和が言語的「正確さ」に重きを置きながら現代語化しました。ほぼ一ページ二時間程度かかる作業でした。その粗訳をもとに全メンバーが成訳にかかりましたが、その作業は意外に困難で半日に数ページした進まないという状況でした。このため、小委員会形式にして主として寺戸委員が地形や山岳名を重点的に見直し、澤田委員が土木工学の立場から検討することとしました。ほぼ十回程度の小委員会を持ちました。小委員会には時間の余裕のある他の委員も適宜参加しました。

小委員会で作成した訳文は途中の三回ばかり全メンバーに配布し意見の集約を行いました。最終的に全委員による検討会を数度にわたって持ちました。

本書に出てくる地名については寺戸委員に短い説明をつけた索引を作成していただき、澤田委員には「デ・レーケのこと」を書いていただき収録することができました。本書の内容をより深く理解する上で大いに参考にしていただけると確信します。

出版に当たっては、われわれの意図を汲んで全面的に御協力していただいた山口修所長を初めとする建設省徳島工務所の方々のほか、多くの方々の御協力を得て何とか出版することができました。特に編集全般にわたってお世話になった堤岑生さん、貴重な写真を提供していただいた木沢村の谷口清孝さん、デザインを担当していただいた浅野昌哉さんには心よりお礼を申し上げます。

平成八年八月一日発行

発行 建設省徳島工事事務所

徳島市上吉野町三ノ三十五

(〇八八六)五四―二二一―

編集 吉野川資料研究会

阿部 滋 澤田健吉 條 半吾

高橋 啓 立石恵嗣 寺戸恒夫

大和武生 横島康吉(五十音順)